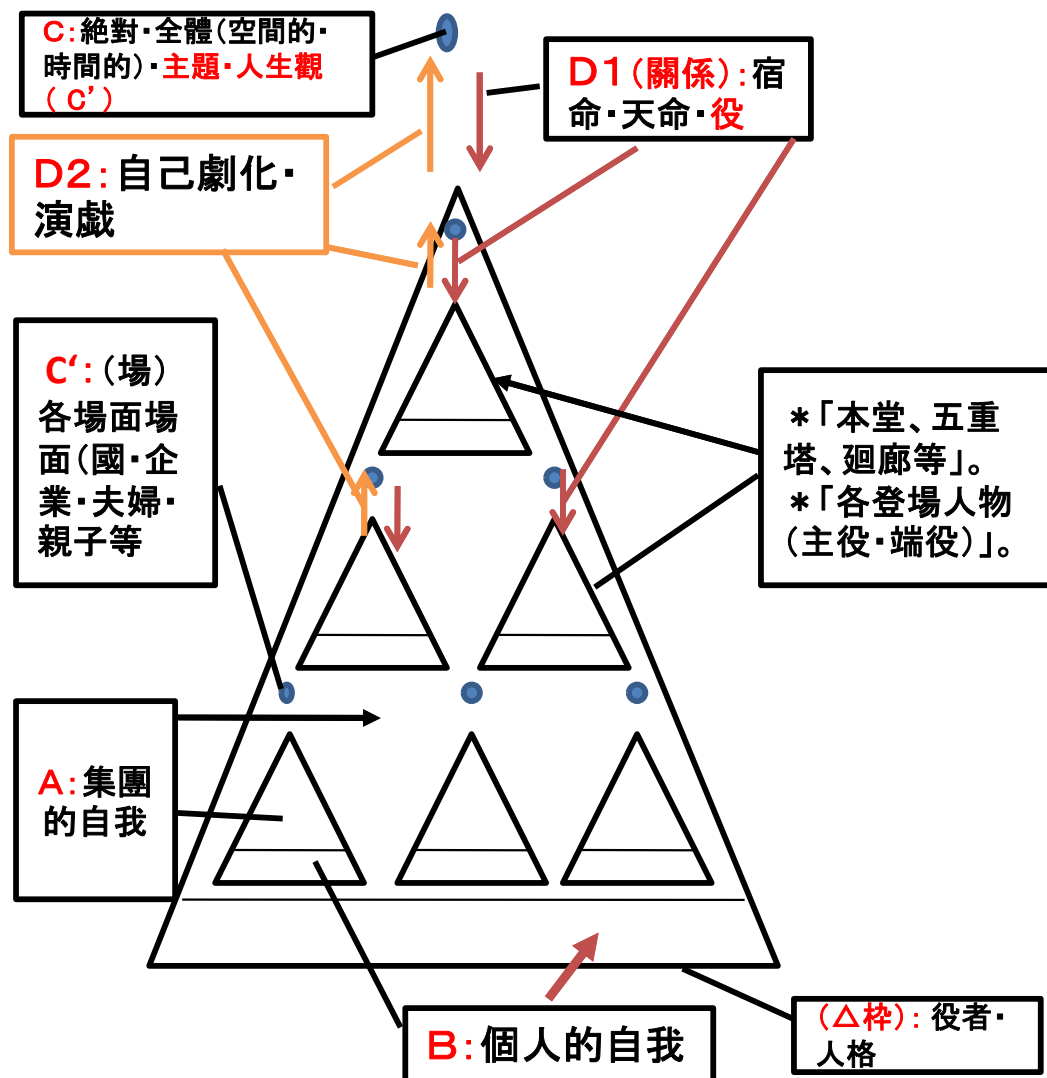


P231《フィクションとしての「完成せる統一體としての人格」》… *P231「今、私はフィクション(B:物語・假説)と現實(A)との混同と言つたが、それは現實(A・場C')もまたフィクション(假説)であるといふ認識が缺けてゐる事から生じる。文化(D1)もまたフィクション(假説)であるが[とはつまり、「歴史C⇒文化D1⇒人間(△枠)⇒保守演戲D2」構圖もフィクション(假説)なのだと言ふ事。そのフィクション圖そのものが下圖「完成せる統一體としての人格」論圖なのだと言ふ事]、今日、日本の文化(D1)の實狀(D1の至小化)はそのフィクションとしての凝集力(D1の至大化)、結晶度(D1の至大化)が弱まり(D1の至小化)、その間隙(荒廢:D1の至小化)を縫つて子供だましの生の現實(フィクションBと現實Aとの混同)がフィクション(假説)面をして罷り通つてゐるに過ぎない」。



*「役者(△枠)にとつて最も重要なことは自分の演じる人物の性格ではなく劇の主題(C全體)は何であるかを見極める事、そして自分の役(D1)がその主題(C全體)とどういふ關係(D1)にあるかを理解することである」(演劇入門:P73)。仏閣を例へて言へば、「本堂、五重塔、廻廊等の部分は全體(C)たる七堂伽藍の構成にたいして、緊密な調和を保つていなければなりません。そしてまた、それらの細部である彫刻や柱や屋根なども、本堂は本堂としての、五重塔は五重塔としての全體(C)的調和を保つと同時に、それを通じて七堂伽藍の全體(C)的調和につながつてゐなければならない。劇においても同様で、各登場人物は、表に現れた形においては主役と端役との別はありませうが、それらが共に仕へる全體(C)としての主題(C)は一つのものであります。端役といふのは、主役に対して端役なのではなく、劇の全體(C)的調和に対して端役なのであります。それは主役に仕へるものでもなく、主役の引立役でもない。引立役といへば、主役も端役も、ともに劇の主題(C全體)の引立役にほかならないのです」(單「演劇入門:P72」)。

[參照文②]全六P704『覺書』(『防衛論の進め方についての疑問』)

*「フィクション(假説)は虚像ではない、堅固な建造物である。フィクション(假説:C・C')に適應(D1)し、これを維持しようといふ努力(演戲D2)は人格を形成する(左圖「完成せる統一體としての人格」論)。逆に言へば、一人一人の人格(△枠)がその崩壊を防ぐための努力(演戲D2)がフィクション(假説)を作りあげ、これを堅固なもの(「完成せる統一體としての人格」論)に爲し得るのだ。が、虚像(即ち、C・C'ではない砂上の樓閣=日本國憲法)への適應(D1の至小化=適應異常)を強ひれば、ソフトウェアである心(B精神)はコンシャンス(良心・自覺:C)への求心力(B⇒C)を失ひ、人格の輪郭(△枠)から外へ沁み出し、空のコップのやうな透明人間になつてしまふ。それはもはや人格(△枠)とは言ひ難い、人格(△枠)の崩壊であり、精神(B)の頽廢である」。

[難解又は重要文]:P457上「」内が恒存文。()内は吉野注。

*「藝術(B)がフィクション(假説)である事にうしろめたさを感じるなら、實行(A)もまたフィクション(假説)に過ぎぬ事のうしろめたさをなぜ感じないのか。また實像としての實行(A)に確かな手應へを感じるなら、藝術(B)もまた實像であり實行(A)である事の手應へをなぜ感じないのか。人生(A&B)を寫實しながら、そこに出来上つた作品(B)は現實(A)とは別次元(B)に属するなどといふごまかしに安んじようとするなら、自分達が人生(A&B)だの現實(A)だのと稱してゐるものも、また何か得體の知れぬものの寫實に過ぎぬのではなかないといふ不安をなぜ懷かないのか。一般に藝術(B)と現實(A)との間の、或は藝術(B)と自然(A)との間の對立や不連續性を餘りに強調し過ぎる様に思はれる。フィクション(假説)は藝術(B)の特權ではない。人生(A&B)や現實(A)も、自然(A&C)や歴史(C)も、すべてがフィクション(假説)である。人生觀(C')なしには人生(A&B)は存在し得ない。どんな人間でもその人なりの人生觀(C')を持つてをり、それを杖(C')にして人生(A&B)を生きて(D2:自己劇化)ゐる」。

*「關係(D1)の無いところでは、個(A&B)も全く捉へ處も手掛りも無いものとなる。個(A&B)よりも關係(D1)の方が先に存在し、一つ一つの個(A&B)は既成の關係(D1:フィクション・假説)の中に生れて來るのだからである」(P455『フィクションといふ事』)。